



写真上 提供／兵庫県
写真下 撮影／米田定蔵



景百新戸神

〈11〉

人の力でつくられるもの



安藤 忠雄

二〇〇〇年春に明石大橋のたもと、淡路島の北東端で国際的な造園博である「ジャパンフローラ2000」が開催されます。

ジャパンフローラの会場一帯は、閑空などの埋め立てのための土砂採取場の跡地で、甲子園球場数十杯分にも及ぶ土砂が山ごと取り去られ、岩肌をあらわにしていたところでした。ここに兵庫県が主体となって広大な森を再生し、人と自然の交流する一大拠点をつくり出そうとの計画がもてあがり、この計画がもたらした。これがジャパンフローラ一帯の国営公園と夢舞台の計画です。

建築工事に先行して、五年前から数十万本に及ぶ苗木を植えるはじめ、いまでは四メートルを越す程の、生命感溢れる森が生まれつつあります。建物の工事を優先するのが一般的な中、これだけの規模で緑化を最優先に工事を行うことは、地球環境の保全が大きな関心を集める中、時代を先取りする試みといえます。

神戸から淡路島の方を眺めると右に明石大橋、

左にジャパンフローラの敷地が望めます。ご存じのように明石大橋は世界一の長大橋です。よく日本人は獨創性に欠けるといわれますが、あれだけの建造物をつくり上げる技術力と忍耐力、協調性は世界に誇れるものに違いありません。そして大橋のような圧倒的な華やかさはないけれども、緑化事業もまた多くの人々の地道な努力と忍耐の結晶であって、世界に誇れる画期的な試みに違いありません。

同様の土や石灰岩などを採掘した跡地は世界中にあります。環境維持の努力が叫ばれる中、人間が壊した環境を積極的に再生する兵庫県の試みは、二十一世紀をリードする気概に満ちています。

風景は一人一人の力の積み重ねで、長い時間をかけつくり出すものです。神戸は、明治期には不毛な岩山に過ぎなかった六甲山を長い年月をかけて緑化した実績をもつ町ですから、これからもきっと、二十一世紀に誇れる神戸の風景を創り出してくれる、そう信じています。

〈建築家〉

地元企業の

ささえとなる銀行に

矢野恵一郎

〔阪神銀行頭取〕



当行は、平成十一年四月一日、「みどり銀行」を合併し、「みなと銀行」と行名を改め、新しくスタートいたします。ネーミングは公募しましたところ、いちばん多かったのは「ひまわり」だったのですが、既に商標登録されていたこともあり、使用できない。二位にあがっていたのが「みなと」でした。神戸のまちが、港が窓口となって発展してきたように、人が出会う銀行でありたいとの理由から「みなと銀行」と改名することになりました。

シンボルマークは、兵庫県の県花「のじぎく」を三つ重ね合わせてデザインしたものです。左下の花は「のじぎく」のように地域の人々に親しまれるという願いを込めています。中央の白い花は地域の人々を、右上の大きな花は未来へ成長する地域の象徴。地域の人々とともに一歩一歩未来に向かって、可能性を広げて行くことを示しています。パンクカラーの濃淡なブルーからは、みなとまち神戸の美しい、海と空をイメージしたいただけるのではないのでしょうか。

新銀行では、口座数、店舗数が大幅に増えるとともに、兵庫県と神戸市と強い絆で結ばれ、地域に密着した「県民銀行」であることを基本姿勢として努力してい

きます。さらに、質素堅実の行風を確立し、親しみやすく、高度な金融知識を身につけた行員の個性的な集団をめざします。阪神・淡路大震災、度重なる不況により、県下の中小企業は厳しい状況に置かれています。わたし自身、長年東京におりましたが、ふるさとの兵庫が悲惨な状態から立ち上がろうとしている。ここまですべてを育ててくれた兵庫に対して何か奉仕をしたいという気持ちは日ごと高まっています。銀行は地域経済の血液のようなもので、貸し渋りで血液が止まってしまうこともあります。県下の企業、とくに中小企業が安心して未来に向かって成長していけるよう、孵卵器のような銀行でなければなりません。

地元企業のささえとなる銀行、利用者の立場に立った顧客満足度の高い銀行をめざしてまいります。

〔矢野氏は4月1日より、みなと銀行頭取就任予定〕



みなと銀行

「みなと銀行」のシンボルマークに、新たな気持ちを感じて——。シンボルマークは、兵庫県の県花「のじぎく」を三つ重ね合わせてデザインしたものです。この3つの「のじぎく」は、「みなと銀行」「地域の人々」「発展する地域」を象徴。地域の人々とともに未来に拓いていく、私たちの姿をシンボリックに表しています。

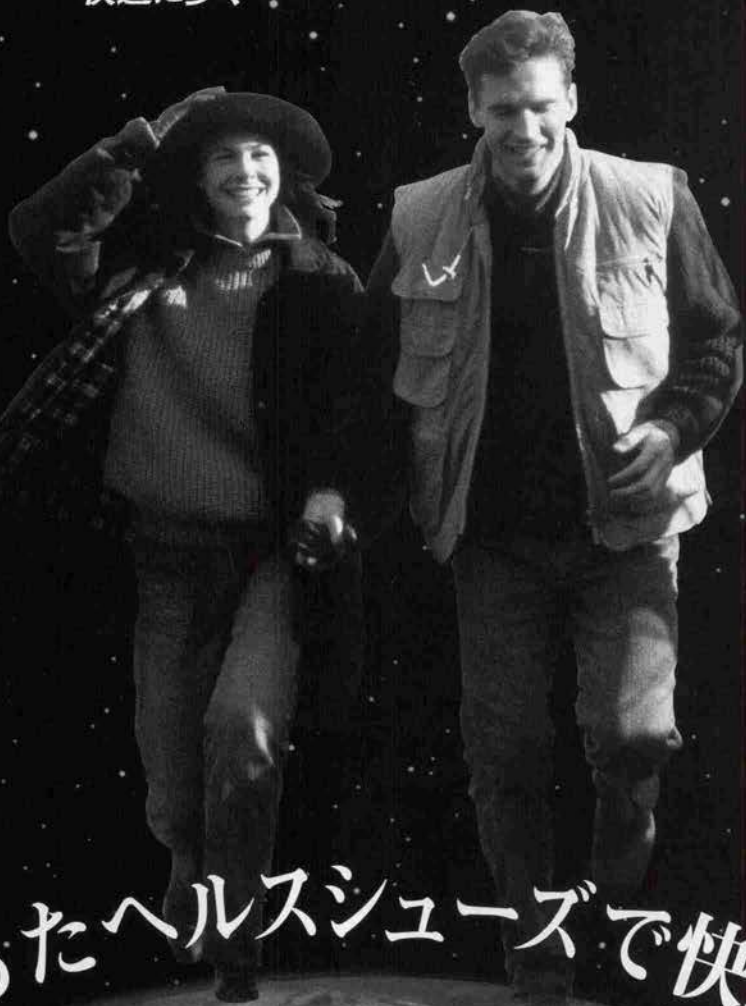
STEP GLOBALLY STEP NATURALLY

地球を歩く

自然に歩く

STEP COMFORTABLY

快適に歩く



足に合ったヘルスシューズで快適歩行



「健康な足を健康に保ち、傷んだ足をいたわることを基本理念に、株式会社アリスは、日本で初めてドイツの整形外科靴マイスターを招聘し、健康靴に関するトータルなサービスを提供しています。健康な足を健康に維持されたい方も、足に悩みをお持ちの方も、最新の整形外科水準に基づいて作られ、ドイツから直輸入の健康靴をぜひお試しください。」

株式会社アリス代表取締役 アリス・クリスチャンス

Japan's Premier Health-Shoe Specialist

高級健康靴と関連資材輸入・機材輸入



〒650-0012 神戸市中央区北長狭通り5-6-6

TEL:078-382-2101 FAX:078-382-2150

営業時間:10:30a.m.~6:30p.m.年中無休

密輸の愉しさ

村松 友視

題字も

イラスト／灘本唯人

私は、酒の密輸をふと頭に浮かべたことが、過去において二度ほどある。

一度目は、私がまだ物書きとして独立する前、中央公論社につとめる編集者の身分のときだった。中学生のときからの私の友人が、武蔵野美大を出て、すぐにアメリカへ行き、曲折のあげくマンハッタンに住んでいるのだが、彼が私に酒を送ってくれた。ある日、三鷹の郵便局からアメリカからの荷物が届いているので、取りに来いという知らせがあった。送り主が件の友人だと分って、私はおどろいた。アメリカへ行った彼とは、十五年ほど会っていないなかったし、こっちから一度だけ手紙を出したが、返事がなかったのだ。

郵便局へ行ってみると、荷物はかなり大きい木箱だった。家へ持ち帰って開けてみると、「NIGHT TRAIN EXPRESS」とラベルに記された平べったい酒の小瓶が入っていた。文字とともに、灯りをつけて走る夜行列車が描かれていて、ちょっとそそる瓶のデザインだった。小瓶は二ダースに二本足りない二十二本、おそらく現地の

税関を出るときと、日本の税関を入るときに調べるため、一本ずつ開けられたのだろうと思った。

とりあえず一本開けて飲んでみると、何となく甘くて濃い味がした。中に入っていた紙片に、「これはマンハッタンの夜明けに、道端にゴロゴロ転がっている一ドルの酒、プロレス好きのきみにぴったりのテイストだと思って」と書きつけてあった。たしかに、マンハッタンあたりのアルコール依存症の連中が好きそうな味だった。

私は、これをどんなふう飲んでやろうかと思ひ、まず糸井重里とのプロレス見物に持って行った。メンバーと状況が何となくふさわしいと思ったのだった。糸井重里は、ひと口飲んでニヤリと笑い、それっきり飲まなかった。よく考えたら彼は酒が駄目だったのだ。ちなみに、その日の試合でアントニオ猪木は、スタン・ハンセンに初めて破れた。

試合が終ったとき、私はふと、この酒はどうして自分の手に届いたのかという思いにつつまれた。これが成り立つのなら、ウイスキー



ーの密輸なんて簡単じゃないかと思ったのだ。おそらく、この小瓶は酒だと思われなかったのだろう……それが、このときの私の結論だった。

それから、十五年が経って、とつくに物書きとなっていた私は、仕事でスコッチの郷といわれるアイラ島へ行った。ラガヴリンの工場へモルト・ウイスキーの蔵を見に行くのが目的だったが、その前に一泊したロンドンの酒屋で、マザー・ウオーターで割ったラガヴリンを飲ませてもらい、その味が頭に残っていた。蔵の見学をしたり、バブで飲んだりしたが、そのストレートよりもマザー・ウオーターの味が気に入ってしまった。

そこで、街のスーパーへ行ってみると「アイラの水」というミネラル・ウオーターがあり、ためしそれを一ダース、日本の住所宛に送ってみた。これまた一本百円くらいの水だから、送って届かなかったところで大した損でもない、いささかいたずらめいた気分でのことだった。

そして、かなり遅れたもののこれまたちゃんと私の住所へ、十本だけ到着した。十五年前と同じ、出るときと入るときに一本ずつ調べられたにちがいがなかった。私は、このときもおどろいてしまい、アイラ島のスーパーから水が届いたことに感動した。そして、なぜか酒の密輸が頭に浮かび、思わずあたりを見わたしたものだ。

十本のアイラ・ウオーターは、知り合いのバーテンダーに何本かずつ配ったが、えらくよろこばれた。彼らはすべて、マザー・ウオーターで店にあるアイラ島のスコッチを割り、選びぬいた客にふるまったということだった。それにしても、十五年前の安酒はともかく、水の到着にもあたりへ気を配るあたり、私の胡散くさが、年とともに増しているということの証しでありましょう。



第9回受賞者発表

神戸っ子賞

月刊神戸っ子創刊30周年を記念して創設した「神戸っ子賞」。分野を問わず、永年の活動の蓄積によって、神戸文化の振興とイメージアップに功労のある方に賞を贈らせていただきます。〔授賞式は四月十五日ホテルオークラ神戸にて〕

選考委員



高村 勤

〈生活協同組合コープこうべ名譽理事長顧問〉

米花 楢
小笠原 暁
石阪 春生
小泉 康夫



第28回受賞者発表

ブルーメール賞

創刊10周年を機に神戸の文化を推進するために文化賞「ブルーメール」〔青い海賞〕を創設いたしました。各部門別に選考会を開き左記の5名の方に賞をお贈りいたします。〔授賞式は四月十五日ホテルオークラ神戸にて〕

◆文学部門



毛 丹青

選考委員

馬部貴司男
島 京子
竹内 和夫

〈エッセイスト〉

santica

The New Heart of Kobe 神戸・三宮さんちか

神戸地下街株式会社

UCC

UCC上島珈琲株式会社

財団法人 井植記念会

kansin

関西西宮信用金庫

第9回神戸っ子賞

第28回ブルーメール賞

— 協賛企業 —
(順不同)

◆ 音楽部門



北浦 洋子
きたうら ようこ

〈ウアイオリニスト〉

選考委員

小石 忠男
響 敏也
中西 弘則

◆ 美術部門



上前 智祐
うまえ ちゆう

〈造形作家〉

選考委員

伊藤 誠
中島 徳博
河崎 晃一

◆ 舞台芸術部門



善竹 隆司
ぜんちく たかし
善竹 隆平
ぜんちく りゅうへい

〈大蔵流狂言師〉

選考委員

佐野 漣箕
岡田 美代
山本 忠勝

◆ ファッション部門



今岡 寛和
いまおか ひろかず

〈神戸ルミナリエ作品プロデューサー〉

選考委員

藤本ハルミ
鈴木 章子
三好 栄三

PEARL COMMUNICATION

kinoshita pearl

今啓パール株式会社

MIWA
SINCE 1888

三輪運輸工業株式会社

田崎真珠

人に、美しいもの。

大月真珠

L&E

株式会社 エルアイシー
数多くの企業家計簿コンサルタント

第9回 神戸っ子賞

「コープこうべ」で地域社会に貢献

高村 勳に



神戸市社会福祉協議会理事長を務めるなど活躍をつづける高村勳さん

選考委員



小泉康夫
(月刊神戸っ子会長)

石阪春生さん
(画家)

小笠原暁さん
(宝塚まちづくり研究所
理事長)

米花稔さん
(神戸大学名誉教授)

選考経過

団体では、無形民俗文化財に指定された神戸南京町春祭実行委員会。幻想的な光を演出する神戸ルミナリ工実行委員会は、同委員会副会長でノリッツ会長の太田敏郎が個人としても候補に。トアロード地区や新開地周辺地区など、各地のまちづくり協議会の活動も目立った。経済人では、東京進出で気を吐く田崎俊作田崎真珠社長、国際交流も盛んな上島達司UCC社長、ユニークな発想の南部靖之パソナグループ代表、日本レスキュー犬協会も手掛ける打間奈津子。にしむら珈琲店の川瀬喜代子は芸術関連への貢献も高く評価された。文化人では、震災復興に尽力する新野幸次郎神戸大学名誉教授や、生化学で世界的に注目される西塚泰美神戸大学学長のほか、作家筒井康隆、音楽家辻久子、書道家望月美佐、建築家安藤忠雄、清家清、元町画廊の佐藤廉、神戸ジャズストリートの末廣光夫、オリックスのイチローらが候補に。最終的に、地域活動・国際交流を永年続けるコープこうべの高村勳への授賞が決まった。

〈文中敬称略〉

推薦のことば

生活協同組合コープこうべの歴史は、一九二二（大正十）年までさかのぼる。社会運動家・賀川豊彦の指導のもと誕生した「神戸」「灘」の二つの購買組合は、生活を支え向上させる組織として地域に広がった。

現コープこうべ名誉理事長顧問の高村勳さんは、一九三三（大正十二）年大阪生まれ。一九四六年に神戸経済大学（現神戸大学）を卒業し、灘購買利用組合に入所した。

一九六二年、合併により灘神戸生協となり、創立七十周年の九一年には「生活協同組合コープこうべ」と名称を変更。組合員数が百万人を突破し、単一生協としては世界最大の規模に。

高村さんは、常務理事、専務理事、副組合長を歴任し、八九年から九三年

まで理事長。八五年から九五年まで日本生活協同組合連合会の会長も兼任し、現在は名誉会長理事。

コープこうべは九五年の阪神大震災で本部ビルが倒壊するなどの被害がありながら、震災当日から物資を調達。八〇年に神戸市と締結していた「緊急時における生活物資確保のための協定」が被災者の救援に大きな役割を果たしたのである。同年、播磨生協と合併し、組合員数百二十五万人を突破。兵庫県全域の暮らしを支えることになった。

高村さんは九四年に勲二等瑞宝章を受章し、九五年にはアルピン・ヨハンソン賞ゴールドメダル（スウェーデン生協連）を受賞。そして今回新たに「神戸っ子賞」が贈られることになった。

〈小泉康夫〉

歴代受賞者

1. 淀川長治／映画評論家
2. 朝比奈隆／指揮者
3. 陳舜臣／作家
4. 宮崎辰雄／前神戸市長
5. 中内 功／ダイエー会長・兼社長
6. 中西 勝／画家
7. 東山魁夷／画家
8. 妹尾河童／舞台芸術家・エッセイスト

一人は万人のために、
万人は一人のために。

高村 勤 いさお

〈生活協同組合コープこうべ名誉理事長顧問〉



撮影／米田英男

コープこうべ住吉店で

「利益共栄／人格経済／資本協同／非搾取／権力分散／超政党／教育中心」コープこうべの前身・灘購買組合と神戸購買組合を生んだ賀川豊彦の書が、役員応接室の壁にかかっている。「究極は、どうすれば人間がよく生きていけるのかということですよ。」

第九回神戸っ子賞に輝いた高村勤さんは、昭和二十一年神戸経済大学（現神戸大学）を卒業し、「まだまだ小さかった」灘購買利用組合に入所。

合併を重ね、コープこうべの組合員数は現在約百二十五万人。単一生協としては世界最大の規模に成長した。店舗や協同購入などによる地域密着型のネットワークは、震災時にも大きな役割を果たす。

「人間のつながりのありがたさを実感し、協同の力を確信しました」

理事長時代の一番の思い出は、日本生協連合会の理事長を兼任していた一九九二年、東京で開催したICA（国際協同組合同盟）世界大会。日本の協同組合運動が世界から注目を集めた。書道、パソコン、ゴルフと趣味は多彩。

「歳をとると、人に出会うのが楽しみで」と笑う。「私の半生が、愛する神戸市民のためにお役に立っていたと認めていただけるなんて望外の喜びです」。神戸市東灘区在住。

〈矢島〉



第28回 ブルーメール賞

<文学部門>

「虫の眼」で日本を観察、新鮮な視点

マオ
毛
タンチン
丹青に



「につぼん 虫の眼紀行」(株式会社法蔵館)

選考委員



竹内 和夫さん
(作家)

島 京子さん
(作家)

馬部貴司男さん
(作家)

■選考経過

小説では、生き生きとした表現力をもつ「慕母の海」の水嶋元、小粒な作品を地道に書き続ける「下駄のころ」の天野政治、企業内の人事をめぐる話を巧みに描いた「心ならずも」のくろだひろし、安定した実力の「桜は今年も咲いた」の駒井妙子が候補に挙がった。「シンプルライフ・シンドローム」の荒木スミシは反復法の多用が気になるが、リズム感のよさ、誘い込むような文脈の流れで現代の若者像を描き、次作に期待大。戯曲では、「猫からの手紙」の渡辺鶴が震災体験から「生きる」ことを主題に書き、充実した作品となっていた。エッセイで、短編小説としても十分に通用するとして、毛丹青の「につぼん虫の眼紀行」が圧倒的な支持を得た。彼は、かつての「ドラゴンの眼」(中国の大きな視点)を捨てさり、一個人、「中国人として」「虫の眼」で日本を探訪することで極めて日本人的な感性に近づき、微細な観察で陰影のある文章を生んだ。日本文学に大きな財産を与えてくれたと評価され、授賞が決定した。

全文中敬称略

推薦のことは

賞の対象に決定した「につぼん 虫の眼紀行」は、なによりも、「文化大革命」という、激動の時間を体験した一人の中国人として生まれ、「一衣帯水」といわれる日本で、留学生活に続いて社会人生活を過してきて十二年の毛丹青氏によって書かれた。

「ドラゴンより虫の眼が好きだ」という、中国人青年のことは、「近代百年」の中で、逆にさまざまな矛盾を増幅させてきた日本人にとって、まさに横っ腹に鋭いメスを突き付ける。このメスは鋭いばかりでなく、森の巨木の小さな葉裏を這う小さな「虫」のような「やさしさ」をもっている。

彼の作品の中で、「いつの間にか風が吹いてきた。(中略)桜で覆われた川の

まばゆさはまるで鋭い剣の刃のように煙雨の中で輝き帯び、私を驚かせた。高瀬川での花見がここまで私を感動させるとは、まったく予想外で、自分でも驚いた。と同時にまた、一種の判然としない震えが足元から全身を駆けぬけた。」という下りがある。

震えが駆け抜けたのは私の方であった。それは、「近代百年」の嵐をくぐりぬけてきたはずの私たち日本人であった。この百年が、知らぬ間にさまざまな矛盾を増幅させたことに気付かぬ私たち日本人の横っ腹(国際語である、「民主主義」も「天皇制」というおぞましいオブラートさえ脱ぎきれない私たち日本人の横っ腹)に突き刺された。

(馬部貴司男)

■歴代受賞者

- | | |
|----------------|-----------------|
| 1. 詩 / 中村 隆 | 15. 詩 / 武田信明 |
| 2. 小説 / 鄭 承博 | 16. 小説 / 山西史子 |
| 3. 俳句 / 小泉八重子 | 17. 詩 / たかとう 匡子 |
| 4. 小説 / 福元早夫 | 18. 小説 / 森 栄枝 |
| 5. 詩 / 三宅 武好 | 19. 詩 / 田中紀子 |
| 6. 小説 / 秋吉 好 | 20. 小説 / 夏巳ゆらこ |
| 7. 詩 / 江頭越子 | 21. 詩 / 渡辺信雄 |
| 8. 小説 / 桜井利枝 | 22. 小説 / 吉田典子 |
| 9. 詩 / 梅村光明 | 23. 詩論 / 村中秀雄 |
| 10. 小説 / 吉保知佐 | 24. 詩論 / 大塚雅子 |
| 11. 詩 / 季村敏夫 | 25. 詩 / 増田まさみ |
| 12. 小説 / 福岡勝利 | 26. 小説 / 野元 正 |
| 13. 詩 / 時里二郎 | 27. 詩 / 岩崎風子 |
| 14. 評論 / 松尾美恵子 | |

感性を再生 につぼん〃体験〃で、

毛^{マオ}
丹青^{タンチン}
〈エッセイスト〉



書齋で

撮影／池田年夫

小学生の頃「毛沢東語録」を暗唱し、

紙に書かれた文字を現実だと思っていた。在日十二年の毛さんは、現在大阪の旅行会社に在籍、中国や香港のマスコミ、日本の「留学生新聞」(編集委員・主筆)などに執筆するかたわら、中国の文化人をインターネットで紹介するなど文化活動にも積極的に取り組んでいる。

日常生活の合い間をぬって、ビデオカメラを片手に日本各地を旅行した。人とのふれあいや体験を、ほとんど人目を引かない小さなことまで念入りに観察する(「虫の眼」で見える)。撮影した録画画像を繰り返し見ることで、失っていた感性を徐々に取り戻せたという。

理屈ばかりの日本論に抵抗がある。例えば、毛さんは、「桜の舞い散る音」を聴こうとする。八年連続で同じ場所を訪れ、四、五時間桜の樹の下に立ったまま、瞳を閉じ、ただ聴く。そのようなして見え、聞こえるものは、文章にすればほんのわずかなものだ。瞬間瞬間を大切にすることが感性を磨く。臨場感をかきたてるような微細な観察と描写が真実を現す。

「この本は、日本を対象にしたのではない。イデオロギーづけで「体験」を知らなかった「非現実」の少年時代を取り戻したかった。ボクにとって日本は「現実」そのものなんです」(宇都宮

BM 第28回 ブルーメール賞

<美術部門>

本当の芸術活動とは何かを私たちに教えてくれる

う え ま え ち ゅ う
上前智祐に



1960年「油（マッチの軸）」の作品



1984年「縫い」の作品

■ 選考経過

選考委員それぞれの口から、重松あゆみ（陶芸、善住芳枝（洋画）、井上広子（立体造形）、春澤振一郎（平面）、松原政祐（洋画）、井上和則（平面）、吉川周而（陶芸）、松田一戯（立体造形）、東山嘉事（立体造形）、椿野浩二（平面）、小谷康子（写真）、吉野晴朗（写真）、秋修一（写真）、高濱浩子（イラスト）、雲丹亀利彦（日本画）、西田真人（日本画）などバラエティに富んだ分野で昨年多彩な活躍をみせ注目された名前がいくつも挙がり、いずれ劣らぬ芸術性の高さや将来性に、選考はかなり難航した。

最終的には、元「具体」のメンバーであり、約半世紀にわたって綿密な手作業による独特の画業スタイルを貫き、昨年には大阪の「ギャラリーくらぬき」で大規模な回顧展が開かれた上前智祐に全員一致で決定した。こつこつと積み重ねてきた仕事の成果が認められたといえる。

（文中敬称略）

■ 推薦のことは

今回のブルーメール賞には、一九二〇年生まれの上前智祐が選ばれた。若手作家が台頭し、新しい美術表現が常に脚光をあびる現代の美術界のなかで、上前は、一九五〇年代から常に自分自身と対峙し、制作を続けてきた。前衛美術グループ「具体美術協会」（一九五四〜一九七二）を出発点に今日に至る独自の歩みは、地味なだけにこれまでは「知る人ぞ知る」画家として受け入れられてきた。

昨年の大阪の画廊での大規模な個展「上前智祐の四十五年展」、そしてこの二月には大阪府立現代美術センターで大回顧展が開かれた。そこでは、五〇年代にはじまる「集積」による絵画、七〇年代にはじまる「縫い」による作品か

ら軽快な近作にいたる上前の仕事の奥の深さを見せつけ、私たちを唖らせてくれた。また作品と同時進行する近年の「自画道」ある人への返書などの著書からは、作品の背景となる彼の生きざまが見え、誠実な人柄がにじみ出ている。

上前の仕事は、しばしば「地味な」「情念」「こつこつ」といった言葉で表現される。多くの画家たちが、賞金と肩書きをねらってコンクール展に発表の場をしばり勝負をかける昨今、芸術家の価値は、歩んできた道のりの一步一步の確かさであることを上前智祐は教えてくれているように思える。派手な振舞いこそないが、常に新鮮さを失わないペテラン作家の受賞である。（河崎晃一）

■ 歴代受賞者

- | | |
|--------------|---------------|
| 1. 彫刻/山口牧生 | 15. 平面/石川晴久 |
| 2. 造形/丸本 耕 | 16. 平面/松原政裕 |
| 3. 洋画/小西保文 | 17. 造形/楠松奎二 薫 |
| 4. 版画/藤原向意 | 18. 彫刻/松山みやび |
| 5. 平面/斎藤 智 | 19. 造形/杉山知子 |
| 6. 洋画/鄭 相和 | 20. 彫刻/田中 昇 |
| 7. 洋画/山本文彦 | 21. 絵画/坪田政彦 |
| 8. 造形/堀尾 貞治 | 22. 絵画/木津文哉 |
| 9. 造形/櫻 忠 | 23. 版画/片山みやび |
| 10. 版画/松谷武判 | 24. 彫刻/牛尾啓三 |
| 11. 平面/木下佳通代 | 25. 絵画/中井浩史 |
| 12. 造形/宮崎豊治 | 26. 絵画/奥田善己 |
| 13. 平面/藤原志保 | 27. 写真/赤崎みよ |
| 14. 建築/武田則明 | 28. 造形/宮崎みよ |

第28回ブルーメール賞〈美術部門〉受賞者

つくる。
ただそれだけ。

うえまえちゆう
上前智祐
〈造形作家〉



アトリエで

撮影／森田篤志

垂水区舞子坂に住み、ほとんどの時間を自宅の隣の「アトリエ」で過ごす。

過去の作品にも手を入れることがしばしばあるという上前さんは「作品はあまり売りたいくない」という。アトリエの壁に無難作にかけられた作品を、
「家にひとつ欲しいいな」などと考え、「モノ」としてしか見ていなかった心を見透かされたようでとぎんとした。

幼児期に耳をわずらい団体になじめず、今になって振り返ると「つくること」が好きにならざるを得なかった。熱意が高じて、絵描きになるため家出して神戸にやってきた少年は、都会でさまよううち、だんだんと絵心を忘れていった。二十歳の時、徴兵検査のため故郷の舞鶴に戻ったが、紆余曲折のすえクレインの免許をとり再び神戸で働くようになる。新しい表現を探しているうち吉原治良氏に出会い、「具体」に参加。細かい点描の油彩、おがくずを塗料で固めた絵画、丹念に運針を重ねた作品など、綿密な手作業による独特の空間表現は同時に、制作にかかった時間までも見る人に突きつけてくる。

作品の文学性を否定。視覚がすべてと考え、タイトルはつけない。

一九二〇年生まれ。まだ、これからどういう風に変わっていくか自分でもわからない、とつぶやいた。 〈土原〉

BM 第28回 ブルーメール賞

<音楽部門>

鋭敏な感性と柔軟な音楽性を兼ね備える

北浦洋子に



昨年9月9日、フェニックスホールでのリサイタルでは聴衆の心を強く捉える演奏が高い評価を得た

■ 選考経過

昨年度の音楽界の活動を振り返り、多くの候補者の名前が挙がった。神戸で着実に活動を続けているアンサンブル・神戸主宰の矢野正浩、音楽監督の阪哲朗、プレイヤーから指揮者となり異色を放つ池田俊、マリンバの軽快な演奏を見せる名倉誠人、実力を高く評価されているバリトンの井原秀人、ジャズの可能性を広げている小曾根真、世界的に活躍を続けるタイガー大越、学内のホールで質の高いプログラムを企画し、市民を招待している神戸学院大学グリーンフェスティバル、ピアノの伊藤勝、子どもたちのオーケストラを指導している林せつなど。

多くのアーティストの活躍が目立ち、審査は難航したが、北浦洋子はヴァイオリン・ソロとしての情熱と探求心、そして地元での着実な活動が認められ、今回の受賞となった。

〈文中敬称略〉



小石忠男さん
(音楽評論家)



響 敏也さん
(音楽評論家)



中西弘則さん
(神戸新聞文化部音楽担当)

■ 推薦のことば

ブルーメール賞は、周知のように神戸になじみの深い芸術家の、神戸を中心とした活動を対象としているが、今回はじめてヴァイオリン・ソロが登場した。北浦洋子である。

こと神戸とは限らないが、すぐれたヴァイオリニストがとにかく少なく、それゆえに貴重な存在であるかという証明ともいえるが、北浦のここ何年かの積極的な活動は、多くの注目をあつめている。一昨年の神戸における貴志康一「ヴァイオリン協奏曲」の好演に続いて、昨年九月には大阪のフェニックスホールで、ベートーヴェンやプロコフィエフを核としたリサイタルを開き、きわめて清新かつ情熱的な演奏を聴かせた。そのリサイタルの成果が、今回の受賞

につながったことは当然である。しかし、彼女はここ数年の普段の活動を通じて、鋭敏な感性と柔軟な音楽性にさらけながら、いつそう強靱な姿勢で音楽の本質を追求してきた。それによって多くの聴衆を説得する普遍性を獲得したことは、高く評価されねばなるまい。

もちろん多くの演奏家と同様、彼女も常に終りのない旅の途上にあるが、もはや確固とした自己主張をもって、朗々と音楽を歌わせる演奏は、大方の称賛を得ている。その活動は独奏、室内楽、協奏曲はもとより、後進の指導に至るまで多岐におよぶが、従来の地味な仕事の上に立って、彼女は、飛躍の時期を迎えた。

〈小石忠男〉

■ 歴代受賞者

- | | |
|------------------|--------------------------|
| 1. 田原富子/ピアノ | 15. 延原武春/指揮 |
| 2. 矢野恵一郎/合唱指導 | 16. 中西 覚/作曲 |
| 3. 上月倫子/バレエ | 17. 青井 彰/ピアノ |
| 4. 今岡頌子/バレエ | 18. 広岡隆正/声楽 |
| 5. 今岡頌子/音楽評論 | 19. 戎 洋子/ピアノ |
| 6. 中村茂隆/作曲 | 20. 大前 哲/作曲 |
| 7. 関 晴子/ピアノ | 21. 中野慶理/ピアノ |
| 8. 坂本 環/声楽 | 22. 田中修二/ピアノ |
| 9. 山内鈴子/ピアノ | 23. 岡本一郎/リユート |
| 10. 小石忠男/声楽 | 24. 畑 儀文/声楽 |
| 11. 伊藤ルミ/ピアノ | 25. 釜洞祐子/声楽 |
| 12. 井上和世/声楽 | 26. [アート・スイド・神戸]/プロデューサー |
| 13. 末広光夫/プロデューサー | 27. 鈴木雅明/指揮・チェンバロ |
| 14. 安芸栄子/声楽 | |

魂で奏でる 心に響く音を

北浦洋子
〈ヴァイオリニスト〉



六蔵荘で

撮影/米田定蔵

ヴァイオリンとの出会いは五才の頃から。大阪音楽大学を卒業後、ハノーヴァー国立音楽大学大学院に留学し、各地で演奏活動を続けてきた。

帰国後、八三年から神戸市室内合奏団でコンサートマスターを務めてきたが、九二年に合奏団を離れ、個人活動に入る。自由になる時間を大切にし、自分の思いを演奏にぶつけてきた。しかし団体を離れたからこそ、周りの助けのありがたさやひとりでは何もできないことを実感し、その感謝の気持ちでヴァイオリンに向っているという。

現在は大阪音楽大学、神戸山手女子高等学校音楽科、桜宮弦楽塾とそれぞれの講師として指導する立場でもある。学生たちに望むことは「純粹で素直であること」。これが音楽の世界でも、一番の上達の道だと教えている。

演奏活動としては定期的にはリサイタルを開き、また、ドイツで組んでいるピアノトリオの演奏会も毎年恒例としている。今年も十月にはドイツを皮切りにヨーロッパ各地を回る。

音は世界共通。その言葉ではない語りかけにより、聴衆の心に深く響き、魂に触れる音を奏でたいという。「音にはその人自身が表れる」。優れた技術の上にある、人間性を高めていく意識が、世界を魅了する音につながっている。

〈前田〉

BM 第28回 ブルーメール賞 〈舞台芸術部門〉

「釣狐」を見事に披いた大蔵流狂言師兄弟

善竹隆司 善竹隆平に



今年1月31日湊川神社神能殿にて、善竹会神戸狂言の会「牛馬」。牛博
芳は隆司(左)、馬博郎は隆平(右)。(撮影/三宅展介)

選考委員



山本忠勝さん
(神戸新聞 編集委員)



岡田美代さん
(演出家)



佐野漣箕さん
(元神戸新聞
取締役文化事業局長)

推薦のことば

善竹隆司君二十五歳、隆平君二十一歳、この二人の兄弟が相前後して「釣狐」を披きました。「披く」は「始まり」で、狂言師の修業の総仕上げ、博士号の認定の誕生を意味します。大蔵流では「釣狐」は能における「道成寺」に似て「極重習」とされる大曲です。「釣狐」は初め白蔵主に化け、後に正体を現わし畏にかかる筋ですが、上半身をかがめ、終始、腰を入れ、獣足という特殊な足運び、発声の甲高き、哀歎と悲愴の極度の緊張感の連続、これを目出度く立派に披かれた(初演)のですから、それぞれに同時に、奨励、授与、つまり本年度は「二名受賞」の特例となりました。

お二人は名人・人間国宝善竹彌五郎

選考経過

白舞若柳吉金吾がリサイタルの「八島」の修羅物の静と動の呼吸が見事。「旅」もドラマチックに演じた。尾上菊見との二人揃久も印象深い。大和尚時は「尾上の雲間機帯」で実力十分。花柳呂月の「豊後老松」は貴重。花柳芳一の「松廻羽衣」は品格がある。花柳箕太郎「奴道成寺」、紫月会花柳伊奈輔「吉原雀」は地道。花柳旭叟は大阪文化祭奨励賞を受賞。須磨琴保存会は存在感あり。黒石紫月は新舞師で日本舞踊への導線を創った。洋舞・貞松・浜田バレエ団の貞松正一郎が「白鳥の湖」二くるみ割り人形」でトップの座を維持。上村未香とのコンビもいい。井勝は創立以来、緑の下の力持的存在。江川バレエ団の大寺實二は有望株だ。モダンダンスの加藤きよ子が復活、二代目竹山と「鬼さんごちら」で異色の舞台。藤田佳代は東山嘉事とジョイント、ケイコ・フジイはN・Yでも注目されている。(芝居)鶴岡大歩のプロデュース。偶の木星に注目。ゆうきじゅんの劇団おもちゃ箱は厳しい条件の中、「ゴッドスベル」を成功させた。(能・狂言)上田観正会の「小袖曾我能」で上田宣照、彰敏、顕榮(十・八・五歳)が舞台に立ち、成長が楽しみ。大蔵流狂言師善竹隆司が「昨年湊川神社神能殿で、隆平が昨年十一月大阪能楽会館で、若さ溢れる「釣狐」を披き、曾祖父彌五郎の「白狐の型」で大曲を見事にこなしした。今年はこの二人の兄弟の将来への期待が大きく、受賞が決定した。

〈文中敬称略〉

歴代受賞者

1. 邦舞/花柳芳恵一子
2. 邦舞/若柳吉由二
3. 能楽/吉井順一
4. 邦舞/花柳芳五三郎
5. 邦舞/花柳古叟
6. 邦舞/藤間緑寿郎
7. 邦舞/尾上菊見
8. 能楽/藤井徳三
9. 仮名手庵歌舞伎/海野光子
10. 演劇/コメディ・ド・フーグツ
11. モダンダンス/加藤きよ子
12. 舞踏/藤田佳代
13. 邦舞/花柳五三輔
14. 映画/白羽弥仁
15. 邦舞/松本尚詩
16. 笑クリエイト社/楠本喬章
17. フラメンコ/東伸一矩
18. 能楽/久田徹二
19. 邦楽/大和楽「蘭の会」
20. 貞松・浜田バレエ団
21. 邦舞/花柳芳圭次
22. 演劇/劇団四紀会
23. バレエ/貞松正一郎
24. 狂言/善竹忠一郎
25. 邦舞/花柳小三郎
26. 邦舞/若柳吉金吾
27. 太田由利/バレエ

師(昭和四十年・八十二歳没)直系の曾孫です。彌五郎師は独自の芸風を完成され、能の金春家元から善竹姓を贈られた最高位の長老でした。その曾孫という栄光の責務は重いでしょうが、幸い、巖父忠一郎師、人間国宝の善竹玄三郎、幸四郎師が身近にご健在ですから、寸暇を惜しんで「伝えの心が形に」「形の伝えが心に」「コツ」の総てを身につけてほしいし、そうされるはずです。脈々たる生命の輝きの道のりは遠かでしょうが、必ずやお二人は、溢れる若さと恵まれた素質の練磨で「継承創生」の大輪の開花を約束してくれるでしょう。多くの人々の祈りを込めての期待と希望や大。おきばりください。

〈佐野漣箕〉

芸道の〃始まり〃に立つ

ぜんちく
善竹隆司
善竹隆平

〈大蔵流狂言師〉



神戸アートビレッジセンター(KAVC)で、隆平(左)、隆司(右)

撮影/池田年夫

「猿に始まり狐に終わる」といわれる狂言の、修行の最終関門ともいえる「狐」(釣狐)を、一昨年に兄の隆司さんが、昨年に弟の隆平さんが演じた。「この世界は一生勉強。決してこれで終わりではなく、あくまで修行の一区切です」ときっぱり。

ともに五歳の時「靉猿」で初舞台を踏んだ。父忠一郎氏の稽古で「型」はつけてもらえても、いかに役を掘り下げ、工夫するかは自分次第。同じ演目でも年齢や役者のキャラクターでまったく違う舞台になる。「舞台で思い通りに演じきり、観客と一体になった時は充実感を感じますが、それでも完全な舞台とはいえません」

二人の関係は、ライバルというより「運命共同体」のようなもの。狂言をもっと多くの人に知ってもらおうと、能楽堂での若手能やKAVCでの「能に親しむ夕べ」シリーズで狂言の舞台の解説や実演を行い普及活動にも努めている。「狂言は笑いの芸能。映画やお芝居のように気軽に楽しんでほしい」

「いつかは善竹隆司の舞台が見たいといわれるような狂言師になりたい」という隆司さんと芸の楽しみなど、まだまだ若々しく、自分らしく演じたいという隆平さん。狂言界の将来を担う二人の挑戦は始まったばかりだ。

〈宇都宮〉

BM 第28回 ブルーメール賞

〈ファッション部門〉

神戸に贈り物をくれたサンタクロース

ひろかず 今岡寛和に



来場者数を254万人、385万人、473万人、516万人と年々増やしている「神戸ルミナリエ」
© Valerio Festi/I&F Inc.

選考委員



三好栄三さん
(神戸ファッション美術館学芸部長)



鈴木章子さん
(神戸ファッション専門学校校長)



藤本ハルミさん
(デザイナー)

選考経過

ファッション都市宣言をした神戸だからこそ、美しい街であってほしい。神戸を愛する人間に共通した願いが、選考の最大のポイントになった。

まず、ファッションと名のつくものとしてまっさきに名前が挙がったのは「財神戸ファッション協会。大成功した「北野工房のまち」とアドバイザー松宮隆男の功績、人材育成懇話会「P.Y.C.N.I.K」の設置が対象となった。また、アニメスペースに続きボールスミスト、一流デザイナーの総合的な企画展を開催した神戸ファッション美術館、昨秋の神戸ファッションフェスティバルのイメージポスターを描いた寺門孝之、レベルの高いファッション人材を育成している神戸ファッション専門学校、ニューヨークおよびモナコでのファッションショーで高い評価を得た藤本ハルミと、いくつか候補が挙がったが、情熱をもって冬の神戸に「ルミナリエ」という最大のイベントをもたらし、美しい神戸の街のイメージを回復・発展させた今岡寛和に対し賞を贈ることになった。

〈文中敬称略〉

推薦のことは

「神戸ルミナリエ」は神戸を象徴する祝祭（フェスティバル）になりました。

阪神・淡路大震災の犠牲者へのレクイエム（鎮魂歌）として、冬の神戸を美しく照らしだすとともに優しく包み込む光の芸術として多くの人々の心にすでに深く浸透しています。そして、ルネッサンスに起源をもつと言われる旧くて新しいこの祝祭は神戸の未来を照らす新しい神戸の象徴として永く続いていくでしょう。

この祝祭が神戸で誕生したのは一人の人物の強い意志と情熱によつてです。今岡寛和。

彼は、光を駆使した祝祭芸術の研究と市民が本当に参加できる祝祭の模索のなかで「ルミナリエ」とそのア

ートディレクターであるヴァレリオ・フェスティに出会いました。あたたかく荘厳な祝祭芸術「ルミナリエ」。

震災で大きなダメージを受けた神戸の人々に感動と勇氣、そして未来への希望をあたえるために多くの困難と障害を乗り越えこの祝祭を神戸にもたらしました。

そして、それは常に外部（海外の文化）を取り入れ咀嚼しハイクオリティなものを生みだしてきた本来の神戸精神の復活であるとともに都市を真に復興させることのできる新たな神戸精神の創造でもあります。

今岡氏の情熱と精神にこの賞を！

三好栄三

歴代受賞者

1. デザイナー／藤本ハルミ
2. 神戸市心身障害者福祉センター／米田博司
3. ニットデザイナー／市野木悦子
4. コウベファッションソサエティ／K.L.T.C
5. アートフラワー／太田タマコ
6. コウベファッションソサエティ／K.F.S.
7. パール／「真珠の街・神戸」を考えるプロジェクトチーム
8. 家具／神戸市家具青年会
9. コウベファッションモデリスト／K.F.M.
10. 書道家／望月美佐
11. コウベファッションクリエーターズ／K.F.C.
12. ジャーナリスト／村上和子
13. デザイナー／中村一夫
14. 柴田グループ代表／柴田音吉
15. デザイナー／丹野最世子
16. デザイナー／大西節子
17. 旗の作家／福井恵子
18. メガネ／服部メガネ店
19. アートフラワーデザイナー／佐藤悦枝
20. ホテルゴーフルリッツファッションライブラリー館長／山本芳樹
21. 百貨店／大丸神戸店

神戸の復興を見守る あたたかな光

今岡寛和

（神戸ルミナリエ作品プロデューサー）



東遊園地で

撮影／米田英男

震災があった年の十二月。

「旧居留地に電飾がついている」という話を聞き非難めいた気持ちになった、そんな人もきつと多いはずだ。

ところが、それは人々の心を魔法のように捉えてしまった。光のアーチがまるで夢のように続き、歩く人の顔はあたたかく照らされ輝いていた。

そして、この美しさを多くの人と共有することができた喜びで、神戸の閉じていた心は再び動きはじめた。

「あの頃、震災によりまわりの人々が負ったところの傷への気遣いで神戸は「笑ってはいけない」という精神的に抑圧された不健康な状況だった」と今岡さんは言う。「ルミナリエが、もう笑ったっていい」と思える、心の節目になれるかもしれない」という思いが今岡さんにパワーをあたえ、さまざまな困難を乗り越えて神戸にルミナリエをもたらすことになった。

ルミナリエの開催される時期、たくさんの方が神戸を訪れる。私たちは少し誇らしげに点灯の瞬間を待つ。そしてまたこの光に包まれることができたことの意味を考える。

「神戸ルミナリエはこれからも人々の心をかよわす本当の意味での『祝祭』として育ってほしい」というのが、今岡さんの願いだ。

（土原）

慰霊と復興のモニュメント

～建設募金のお願い～

神戸市では、震災犠牲者の慰霊と市民への励まし、震災からの復興、大規模災害に対する世界規模での連帯による復興の意義を内外にアピールしていくため、「慰霊と復興のモニュメント」をつくります。

作品は、巨大な御影石やガラス、水などを使って、慰霊の思いと復興に向けたみなぎる力と連帯を表わす、楠田信吾氏の作品です。設置

場所は、中央区の東遊園地内で、来年1月17日に除幕を予定しています。

このモニュメントの設置を、この震災に関わったすべての市民、すべての企業、すべての団体へのご協力のご賛同を呼びかけ、大災害を乗り越えてきた私たちの力で建設したいと考えています。

皆さんのご理解とご協力をお願いします。



慰霊と復興のモニュメント完成予想図

募集方法

市内の郵便局及びさくら銀行に備え付けの振り込み用紙で下記までお振込みください。(振込手数料は事務局負担)

- 郵便局をご利用の場合
(口座番号) 00920-7-91516
- 銀行をご利用の場合
さくら銀行 神戸市役所出張所
普通預金 (口座番号) 3101611
- 口座名義

慰霊と復興のモニュメント設置実行委員会

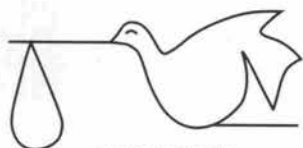
★募資金額については、個人一口3千円、法人一口10万円、団体一口5万円以上を目安としますが、基本的には金額を問いません。

★募金をいただいた方のお名前を保存いたします。

★この募金は、地方公共団体に対する寄付金と同様に税制上の優遇措置があります。

☆お問い合わせ先

慰霊と復興のモニュメント設置実行委員会 TEL078-326-6903
神戸市市民局文化振興課 TEL078-322-5165



SAMOTO CLINIC



ママといっしょに



あかちゃん：根本 直幸 くん
(平成10年5月25日生まれ)

マ マ：素子 さん

「元気でたくましく育ってネ！」

★佐本産科・婦人科★

佐本 学

神戸市兵庫区中道通4-1-15
TEL:078-575-1024 (病室TEL:078-577-7034)

市バス上沢4 停南スグ

● 駐車場完備 ●